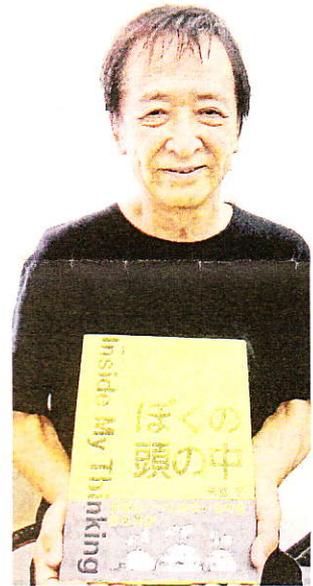


動く彫刻を制作 新宮晋さん

ふわり 風の造形の軌跡

風や水など自然のエネルギーで動く彫刻を手がける造形作家、新宮晋さん(76)が『ぼくの頭の中』(ブレーンセンター)を今月末、出版する。30代以降のプロジェクト15を選び、それらがどんな発想で生まれたのかを手がきのスケッチやエッセーなどを交えて紹介している。

(木村未来)



「この本で自分のすべてをさらけ出し、次の段階に進めたらと考えています」と語る新宮晋さん

東京芸術大で絵画を学んだ新宮さんは、イタリヤ留学中に表現方法を立体に転じる。帰国翌年の1967年、東京の日比谷公園で「風の造形」展を開催、風

で動く作品を展示したことがきっかけで、70年の大阪万博会場で野外彫刻を制作することになった。会場の人工湖に浮かぶ「フローティング・サウンド」だ。『ぼ



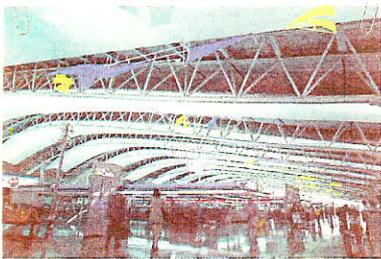
Rengo Piano checking the model at my studio in Sanda, Hyogo Prefecture in 1990. 1990年、兵庫県三田市のぼくのスタジオで模型をチェックするレンゾ・ピアノ。

Various kinds of 'fish' that swim in the air were made and tested. 空気の中を泳ぐ様々な魚たちが試作され、テストされた。



①レンゾ・ピアノが模型をチェックする写真に添えられた文字は手書き。新宮さんのスケッチブックをのぞくようだ

②関西国際空港に設置された作品「はてしない空」の写真は、クリップでとめたようなイメージで掲載される(いずれも『ぼくの頭の中』より)



くの頭の中』で最初に取り上げられるプロジェクトである。

目を引くのが、作品の原点にある「風の造形」展に出品した9点のスケッチだ。伸びやかな形が自由な発想を伝える。これらを踏まえて、竹筒に注がれた水の重みで反転し、元に戻る際に音がする「ししおどし」の原理を生かした「フローティング・サウンド」が生まれた。仕掛けを示す素描などの端に、サイズを出す計算式のメモも残り、作品となるまでのプロセスを示す。

94年に開港した関西国際空港のために制作した「はてしない空」についても記されている。

設計したレンゾ・ピアノは、旅客ターミナルビルの屋根が描くゆるやかな弧に沿って空気が流れる空間を構想。その動きを視覚化する装置を考えてほしいと依頼され、「空気の中を泳ぐ魚」を思い浮かべてプランを組み立

「ぼくの頭の中」出版 15件、スケッチで紹介

魚や鳥のように見える造形のスケッチや設計図を描き、模型を制作。レンゾ・ピアノが、兵庫県三田市にある新宮さんのアトリエを訪ねてチェックする様子をとらえた写真も載せている。試作を重ねて完成したのは、カーボンファイバーの骨組みに青と黄のクロス張った長さ約14メートルの立体。空気の動きに応じて揺れる17基を天井から吊した。建築家との出会いが、空に飛び立つ旅行者を思わせる作品に結実したのだ。

最も新しいプロジェクトとして掲載されているのが、構想中の「スプラインアイランドの風車」。トルコ・イスタンブール近郊のスプライン島に、発電もする風車群をたてる提案をしている。手をつないだ親子が風車を見上げる姿を描いたスケッチで締めくくった。

「かつての自分なら恥ずかしくて出せなかった本」と新宮さん。「でも、創造の軌跡を明らかにし、試行錯誤の連続の中で道を切り開いてきたのだと伝われば」

*

10月26日から11月30日に大阪府中央区の「山木美術」(☎06・6209・0005)で個展を開催。11月3日、同区の芝川ビルで独のトーマス・リーデルスハイマー監督によるドキュメンタリー映画「ブリーディングアリス 新宮晋の夢」も上映する。

三田の造形作家・新宮晋さん

アイデアあふれる 「頭の中」を披露

風や水で動く彫刻で世界的に知られる造形作家新宮晋さん(76)＝三田市＝によるスケッチ主体の作品集「ぼくの頭の中」(ブレンセンター刊)が出版された。自ら選んだ初期から近年までの15点について、作品写真に、手書きの構想メモやデッサン、設計図などを交えて紹介。題名通り、独創的な作品を次々と生み出す、自らの頭の中を披露した。「アート関係者だけでなく、さまざまな分野のものづくりに興味のある人たちの役に立てば」と話している。(堀井正純)



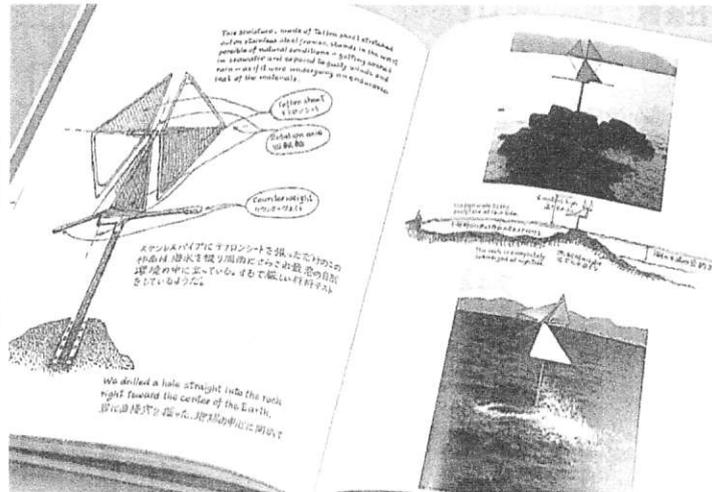
アトリエ近くの池に設置した作品「光のさざ波」の前に立つ新宮晋さん＝三田市藍本

新書は、スケッチブックのようなスタイルで本を出そうとのアイデアから生まれた。作品誕生の裏話なども記した文章は、英文も併記。文字はいずれも新宮さんの手書きだ。

風や水の力で軽やかに舞う彫刻の数々は、造形美だけでなく、「動き」の優雅さやユニークさが特徴で、制作には空気が力学などの知識も求められ

スケッチ集刊行

「光のシンフォニーエッタ」については、「限られた時間と難しい条件の中で、必死にテストを繰返



「ぼくの頭の中」に収録された、広島県・生口島の磯にある「波の翼」の作品スケッチや写真

る。このため、作品デザインや設計図には、科学的な合理性と美が融合した独特の面白さがある。

「空気を捕えるための構造は、先端は軽くしなやかに、付根は硬く強くなければならぬ」。ニューヨークにある作品「遠い空」について説明した一文は、どこか科学者の言葉のよう。一方で、その作品の発想源に、鳥やチヨウの羽など自然の造形があることが図示され、興味深い。

「完成作の写真と載せた作品集では面白くないので、こういう形で創作過程も見てもらいたい」と新宮さんはPRしている。

A4判・124ページ。31500円。ブレンセンター06・6209・03000

※ ※

新宮さんの作品をめぐっては、大阪市中央区伏見町3の画廊「山木美術」(06・6209・0005)で動く彫刻や絵画の新作展を開催中(30日まで)。また、来春、神戸市東灘区の市立小磯記念美術館で企画展が計画されているという。



中村 桂子 評

ぼくの頭の中

新宮晋著(ブレーンセンター・3150円)

「ぐるぐる自転しながら秒速30キロの猛スピードで太陽の回りを飛び続ける小さな星、それが地球だ。この星には、空気がある。水がある。そして太陽からは、途切れることなく暖かい光が届けられる。それらの全ての要素は、大気の中で攪拌され、循環しながら、地球独特の穏やかな自然環境を生み出している。そのお陰で地球は、多種多様な生命が溢れる、宇宙の中でも飛びっきりユニークな星になった。

ぼくはこんな星に生まれた。人間として。これは奇跡以外のものでもない。ぼくは、この幸運を楽しみな

がら、風や水、引力といった自然エネルギーに魅せられて、作品を作り続けている。ぼくの作品は、それぞれ固有の風景や環境、素晴らしい人たちとの出会い、新しい原理の発見といった

自然に溶けこんだ美しさを生み出す場所

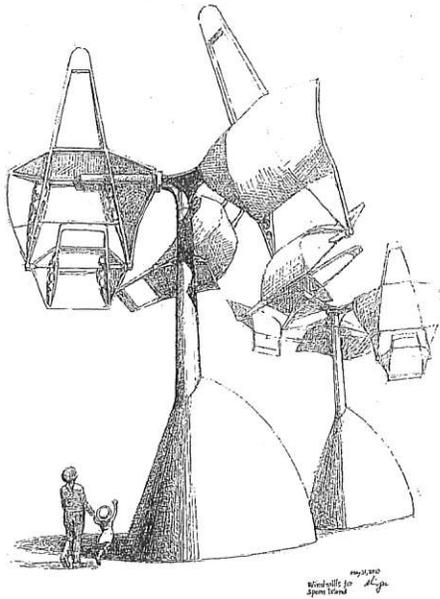
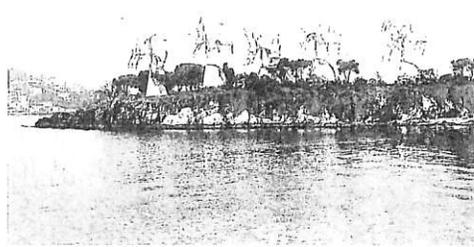
様々な要因が奇跡的に重なった結果、生まれてくる。一つ一つが掛け替えのない物語のように。ふと思う。もし地球を訪問した異星人が、お土産に何が良かったと考えた時、ぼくの作品を選んでくれるのではないだろうか。こんなに地球らしいものは、他にはないという理由で。」

「はじめに」の全文である。長い引用をお許しいただきたい。本書紹介の言葉としてこれ以上適切なものは考えられなかったのである。風や水のエネルギーで美しい動きを見せる著者の作品を御存知の方ならその通りと言って下さるだろう。関西国際空港を設計したイタリアの建築家レンゾ・ピアノは、国際線出発ロビーに美しい空気の流れを作り、それを見えるようにして欲しいと著者に依頼した。品、「フロートینگ・サウンド」もなつかしい。「風と遊ぶ子供たち」「イルカのカップル」「風の音階」「月に魅せられて」などの各章で語られる著者の作品は、自然を生かしながらとてもなく創造的で独自の物語をもっている。それは、日本だけでなくパリ、ジュネーブ、ニューヨークなど世界中の人を楽しませてくれる。

カーボン・パイプのフレームをアルミダイキャストでつないだ青と黄色の魚たちが、意志もつかのように自由に泳いでいる作品の名は「はてしない空だ」。一九七〇年の大阪万博の「進歩の湖」に、大型しおどしのような装置を作り、湖面に広がる波と音とをシンクロさせた作

の文と作品の設計図・デッサン・写真が並ぶユニークな作りである。読み、眺めていると、製作中の頭の中が垣間見える。わかったなどと偉そうなことは言えないけれど。どっしりした存在感がありながら、体では感じないほどの微妙な風を受け止めてまわる風車

下で紹介した『ぼくの頭の中』より、造形作家の著者がデザインした発電風車のスケッチ。建設予定地、トルコ・スプーン島の写真に手描きで加えられた完成予想図のほか、これまでに手がけた作品の精緻なスケッチ、完成後の写真などが多数収録されている。



は生きものに見える。それを生かして発電をし、自然エネルギーで自活する村、「フリージング・アース」の提案は魅力的だ。手始めに兵庫県三田市で「田んぼのアトリエ」を始め、そこに立てた「元気のぼり」は、東日本大震災の被災地の人を元気づけた。トルコの方が、イスタンブールの沖に浮かぶスプーン島で「フリージング・アース」具体化の道をつけてくれたとのこと。著者は、東洋と西洋を結ぶシンボルにしたいと語っている。私の好きな作品の一つに三田市の公園にある「水の木」がある。空中でまわるパイプからカーブを描いて落ちる水。「落トする水を追いかけて、子供たちは走り回り、びしょびしょになる。「芸術が実用かなどという問題を越えて、自然に溶けこんだ美しさを生み出す」『ぼくの頭』は今何を考えているのだろうか。覗いてみたい。